



大阪+知的障害+地域+おもろい=創造

## 知の知の知の知

社会福祉法人大阪手をつなぐ育成会 社会政策研究所情報誌通算 3171 号 2016.8.7 発行

【一筆多論】生きる意味のない命など存在しない 「差別の土壌」枯らそう 論説委員・

中本哲也

産経新聞 2016年8月6日

「津久井やまゆり園」正門前に設けられた献花台に、大勢の人たちが花を手向けに訪れていた＝7月29日午後、相模原市緑区(三尾郁恵撮影)



《障害の有無や個々の能力は関係ない。人の尊厳は命そのものにあるのだと思う》

4月30日付の一筆多論の最後の段落を再掲した。重複になるが、学生時代に障害児のキャンプで出会った男の子のことを書く。

年齢は5歳くらい。小児がんで、生後間もなく頭部の腫瘍の摘出手術を受けた際、左右の眼球を失ったという。

身体障害と知的障害が重複し、自分で歩くことも言葉で意思を伝えることもできない。

複合する重度障害がもたらす困難は、想像を絶するものであったに違いない。

それでも、男児は生きてきたんだ。数え切れない困難の総和を上回る、強い強い「生きる力」で。

眼球のない男児に出会ったときに感じた人の生命と尊厳の重さは、30年以上が過ぎた今も胸に残る。

《生きていることが大切なのだ》

7月26日、その思いが踏みにじられた。

相模原市緑区の障害者施設「津久井やまゆり園」で起きた、元職員による殺傷事件である。

40分ほどの間に45人が刃物で刺され、19人が死亡、26人が重軽傷を負った。

「意思疎通のできない人を刺した」。植松聖容疑者の供述に背筋が凍る。

複数の重い障害を抱え、眼球のない男児と同じように強い力で生きてきた人たちが、残虐極まりない犯行の標的にされた。

「障害者は不幸しかつくりたくない」「重複障害者は生きていても意味がない」

容疑者の供述などから浮かぶ歪(ゆが)んだ差別思想は、ユダヤ人や障害者を大量殺戮(さつりく)したナチス・ドイツに通じる。人の尊厳を蹂躪(じゅうりん)し、社会を脅かす考えだ。

差別思想と突出した殺意は、今年2月に衆院議長公邸に容疑者が持参した犯行予告の手紙などにも表れ、「他害の恐れがある」として措置入院にもなった。

犯行を直接的に防ぐ機会はこの段階しかない。

今回の事件で、差別的な目を向けられた精神障害の患者もいるだろう。多くの障害者の人権を守るためにも、容疑者の入退院の経緯などを徹底的に検証し、再発防止につなげなければならない。

社会全体で取り組むべき課題もある。「差別の土壌」を枯らすことだ。

事件の全体像は極めて特殊だが、容疑者の差別意識が社会と無関係に突然変異で生じたとは思えない。

今の社会は、人の尊厳を容赦なく傷つける醜い言葉が蔓延（まんえん）している。

差別に満ちた土壌や偏見に傾いた空気が、植村容疑者の心に歪んだ思想を芽生えさせ、肥大化したとみるべきだろう。

すべての差別や偏見を洗い出し、浄化するのは容易なことではない。個々の取り組みの効果は小さくて見えないかもしれない。

眼球のない男児、そして凶刃の犠牲になった人たちは、困難に打ち勝つ「生きる力」を持っていた。

同じように、国民一人一人が、差別のない共生社会の実現を目指す強い意志を持ち続けたい。

その積み重ねは「生きる意味のない命など存在しない」ことの証明にもなるはずだ。（論説委員・中本哲也）



### 共生型コミュニティの未来＝中央大教授・宮本太郎

毎日新聞 2016年8月6日

相模原市の障害者施設で起きた殺傷事件の衝撃は大きい。誰もが生き難さを抱える時代にあって、自分よりさらに弱いものを括（くく）りだし、その存在まで否定する思考と行動に慄然（りつぜん）とする。

こうした事件が起きた今こそ、地域に芽生えつつある新しいつながりに注目したい。皆が生き難さを抱える時代は、健常と障害、支える側と支えられる側の間にはっきりした境界線が引けなくなる時代でもある。実際のところ、障害者、高齢者、子どもといった括りを超えて人々が支え合う共生型の施設やコミュニティが広がりつつある。

先月、その一つである金沢市の「シェア金沢」を訪問した。高齢者コミュニティとして紹介されることが多いが、障害の重い子どもを含む障害者施設も軸になっている。そこに、サービス付き高齢者向け住宅やデイセンターなどが併設され、さらに芸術専攻の学生のためのアトリエ付き住宅もつくられた。学生は月に30時間以上のボランティアをすることで家賃が抑えられる。あらかじめ支え合いの形が決められているわけではないが、住宅や施設は玄関が向かい合うように配置され、それぞれをつなぐ道は譲り合わないと通れない幅である。出会ってつながりをつくっていく仕掛けだ。障害者の就労施設でもある共同売店の運営に高齢者が参加する。同じく障害者も働くレストランは味も良いので近隣の住民が集う。「ごちゃまぜ暮らし」は皆を元気にする。

相模原市の事件とのあまりの明暗の差に戸惑う。しかしどちらも現実なのだ。未来をどちらに引き付けるか。政府は再発防止のため措置入院の在り方見直しを指示したが、共生を支える仕組みづくりこそ急がれるべきではないか。

### 措置入院めぐり、10日に「検証会議」 厚労省が調整

朝日新聞 2016年8月6日

厚生労働省は、相模原市の障害者施設で起きた殺傷事件を受けた再発防止策を検討する「検証会議」を10日に立ち上げる調整に入った。障害者福祉や心理学の専門家らと交えて具体的な対策の検討を始める。措置入院や施設の安全管理のあり方が焦点だ。

政府は先月28日に関係閣僚会議を開き、安倍晋三首相が再発防止策の検討を指示していた。相模原市の事件では、2月に措置入院した植松聖（さとし）容疑者（26）が12日後に措置を解除され、その後には犯行に及んだ。会議では「退院後のフォローアップ体制」が課題となる。（河合達郎）

### 社説：相模原事件 匿名報道が問い掛けるもの

毎日新聞 2016年8月6日

19人の命が奪われたのに、いったい誰が犠牲になったのか、どんな人生を被害者は歩んできたのか、ほとんどの国民は知らない。「匿名」が問い掛けるものについて考えたい。

相模原の障害者入所施設「津久井やまゆり園」で障害者19人が元職員から殺害され、26人が負傷した事件で、神奈川県警は被害者全員を匿名で発表した。

殺人事件では警察は通常、被害者を実名で発表するが、同県警は匿名にした理由について「知的障害者の支援施設であり、遺族のプライバシーの保護等の必要性が高い。遺族からも特段の配慮をしてほしいとの強い要望があった」と説明した。

一方、「障害を理由に匿名発表はおかしい」と批判する一般の障害者や家族も多い。障害者に対する偏見や差別に満ちた植松聖容疑者の言い分ばかり報道され、被害者に関する情報が乏しいというのである。「匿名」が壁になり、被害の痛ましさをメディアが十分に伝えられないことに、もどかしさを感じている人は多いはずだ。

子供に障害があることを恥ずかしい、隠したいと思っている家族はいる。ただし、家族にそう思わせている社会のありようにも問題の目を向けるべきではないか。

障害があっても親とは独立した人格を認めなければならないことは、日本も批准した国連障害者権利条約の原則である。家族の気持ちと障害者本人の望みが異なることはよくある。遺族のプライバシー保護だけでなく、被害にあった障害者自身についても考えたい。

入所施設をめぐる問題にも触れねばならない。欧米ではプライバシーのない集団生活は人権侵害だとして入所施設は次第に閉鎖され、地域での生活が保障されてきた。

日本では障害者の高齢化を背景に入所施設を求める親も多く、約12万人の障害者が現在も各地の入所施設にいる。親は安心かもしれないが、障害者本人の意思がどのくらい反映されているのかは疑問だ。匿名問題の背景にはそうした事情もある。

ただ、近年は日本でも入所施設から地域での生活に移行する障害者は少しずつ増えている。当初は家族がかたくなに反対するケースが多いが、障害者の人権に関する状況や地域でも安心して暮らせる選択肢について丁寧に説明すると、家族の心境が劇的に変化することがよくある。

今回、県警や施設側が遺族にどのように説明したのか気になる。理不尽な被害にあったことを実名で報じられる意義をきちんと説明した上で遺族の判断を仰いだのだろうか。

「匿名」では血の通った人間の実像が伝わらない。

#### **宛名取り違え誤送付 障害者手帳の写し同封 高知** 産経新聞 2016年8月6日

高知県障害保健福祉課は5日、公共施設などの障害者用駐車場の利用証を対象者7人に送る際、2人の宛名を取り違えたと発表した。

住所、氏名のほか障害名や等級が記載されている身体障害者手帳の写しが同封されていた。県は2人に謝罪、誤って送った文書を回収し、正しい利用証を交付した。

同課によると、中央東福祉保健所の職員が7月22日、2人の利用証と封筒の宛名を取り違えた。手帳の写しは本人確認のため預かっていた。同25日、2人のうちの1人が来所し発覚した。

#### **障害者殺傷事件を引き合いに脅迫 男を逮捕** NHKニュース 2016年8月6日

栃木県佐野市の無職の男が、群馬県内の病院に電話して、応対した事務員に対し、相模原市の障害者施設で入所者が刃物で刺された事件を引き合いに出して、「病院の関係者をしとめる」などと脅したとして、脅迫の疑いで警察に逮捕されました。

逮捕されたのは、栃木県佐野市の無職、横尾和城容疑者（46）です。

警察によりますと、横尾容疑者は5日夕方、群馬県館林市の病院に電話して、応対した事務員の女性に対し「相模原の事件みたいに病院の関係者20人くらいをしとめる。これから向かうから」などと脅したとして、脅迫の疑いが持たれています。

警察の調べに対し、横尾容疑者は「脅迫めいた電話をかけたことは間違いありません」などと供述し、おおむね容疑を認めているということです。

横尾容疑者はこの病院に通院していたということで、警察は病院に対して何らかの不満があったとみて、詳しいいきさつなどを調べています。

#### 特別支援学校の教員、免許保有 74% 15年度 日本経済新聞 2016年8月5日

2015年度に全国の国公私立の特別支援学校に勤務した教員のうち、知的障害や肢体不自由など障害に応じた指導方法を学んだ「特別支援学校教諭免許状」を持っていたのは74.3%だったことが5日、文部科学省の調査で分かった。

保有状況は改善しているが、文科省は20年度におおむね100%にするとの目標を掲げており、国や自治体による免許取得促進の取り組みが欠かせない。

15年5月時点で特別支援学校の教員は約6万5千人。このうち視覚、聴覚、知的の各障害や肢体不自由、病弱という障害種別の免許を持って指導していた教員は計約4万8千人(74.3%)だった。同じ方法で集計を始めた07年度(68.3%)からは年々増加。障害種別では知的障害が77.2%と高い一方、聴覚障害は49.9%、視覚障害は57.3%などとばらつきがみられた。

文科省によると、聴覚や視覚障害の免許を取れる大学が少ないことが一因で、担当者は「教員採用後に免許を取れる環境づくりを進めたい」と話す。東京都は15年度から放送大学で免許状を得た教員に受講料を補助する取り組みを始め、約100人が利用したという。

特別支援学校の教員は障害に応じた免許状の保有が義務付けられているものの、小中学校などの教員免許があれば「当分の間」は教えることができる。

#### 内部障害者に理解を 造形作家サトウさん、冊子作成 岐阜新聞 2016年08月06日



内部障害者を知ってもらおうと作った冊子「喜笑展開」を手にするモモMサトウさん＝揖斐郡大野町の自宅

岐阜県揖斐郡大野町の造形作家モモMサトウさん(58)が、外見では障害が分かりにくい「内部障害者」への理解を求める冊子「喜笑展開(きしょうてんかい)」を作った。自身も難病と闘うサトウさんは「見た目では分からなくても障害のある人たちがいることを知って」と話す。

内部障害は心臓や呼吸器など内臓に疾患がある障害。全国で100万人以上いるとされる。外見では分かりづらく、電車やバスの優先座席に座れなかったり、周囲から配慮を受けられな

かったりする。

サトウさん自身、体の水分が尿になって大量に出て行ってしまう難病の中枢性尿崩症、原因不明の痛みが生じる線維筋痛症、パニック障害などと闘っている。「障害があると分かってももらえず、つらいこともあった」と振り返る。

会員制交流サイト(SNS)で闘病仲間と語らううち、同じ悩みを抱えている人が多いことに気付き、「内部障害者を知ってもらおう」と冊子の制作を決めた。リハビリとして行っている毎朝の散歩で見つけた富有柿の花、フクロウやヒバリなど身近な風景の写真43枚を掲載。内部障害がある人の思いを伝えている。

サトウさんは「ほんのちょっとでいいから手助けが欲しいときがある。関心を寄せてほしい」と話す。B6判40ページで800円(税別)。紅茶専門店くらぜん(岐阜市元町)

などや、インターネットで販売している。

## 社会保障制度の転換期に直面した日本 - 「福祉コモンズ」の可能性を探る

[一般財団法人全国勤労者福祉・共済振興協会]

～全労済協会が公募委託調査研究の報告会を開催!!慶應義塾大学の駒村教授が研究報告～

時事通信 2016年8月5日

全労済グループの基本三法人の一つでありシンクタンク事業を担う全労済協会（一般財団法人 全国勤労者福祉・共済振興協会 理事長：高木剛）は、去る2016年8月2日、公募委託調査研究事業における、慶應義塾大学経済学部 教授 駒村康平氏の研究報告会を開催しました。

全労済協会では、広く相互扶助思想の普及を図り、勤労者の福祉向上とその発展に寄与することを目的に、2005年から毎年、勤労者の福祉に資する研究テーマを設定して「公募委託調査研究事業」を行っています。

この度の報告会は、慶應義塾大学経済学部教授の駒村康平氏による公募委託調査研究「分権型福祉国家・福祉社会の確立に向けて-地域共同体・福祉の構築-」について、その研究成果を広く知っていただくことを目的に開催



しました。

駒村氏は、政府の社会保障審議会委員・生活保護基準部会部会長・障害者部会長、前厚生労働省顧問、社会保障改革国民会議委員などを歴任されており、統計資料や実践報告など様々な資料を用いて、多角的な視点から充実したご報告をいただきました。

報告は、日本の急激な高齢化や人口減少、複雑な社会問題の増加による社会保障制度や公的部門の機能が低下する一方、地域社会ではNPOや民間組織が一定の成果を上げている動きがあることを取り上げ、地域の多様な問題に対応し、同時に縦割り行政の問題を解消する包括的なワンストップの組織として期待されている「地域自治組織」による「福祉コモンズ」の可能性を示す内容となりました。

■報告会の概要 「全労済協会公募委託調査研究報告会」

日 時 : 2016年8月2日(火) 15時45分～16時45分

場 所 : ホテルサンルート新宿 大会議室「芙蓉」

報告者 : 慶應義塾大学経済学部 教授 駒村康平氏

研究テーマ : 分権型福祉国家・福祉社会の確立に向けて-地域共同体・福祉の構築-



### ■研究報告の流れと概要

#### 1章：社会問題の複雑化と社会保障制度の限界

日本の人口減少・高齢化、地域偏在、格差拡大といった社会経済構造の変化と、これまで生活保障を担ってきた社会保障制度・公共部門の機能低下について指摘

#### 2章：地域における社会問題への様々な取り組み事例

現地調査を行った秋田県藤里町、大阪府豊中市の地域事例から、

地域福祉・互助の動きの広がりを説明

### 3章：互助による地域社会の再構築

政府の動きと今後の地域互助の仕組み、民主的に運営される

地域自治組織による「福祉コモンズ」の可能性を考察

◇本研究の内容をまとめた研究報告誌は9月末に当協会より発刊予定です。

#### ■報告者プロフィール

#### 駒村 康平 (こまむら こうへい)

慶應義塾大学経済学部教授。慶應義塾大学大学院経済学研究科博士課程単位取得退学後、国立社会保障・人口問題研究所研究員、駿河台大学経済学部助教授、東洋大学経済学部教授を経て、2007年4月より現職。社会保障審議会委員・生活保護基準部会部会長・障害者部会長、前厚生労働省顧問、社会保障改革国民会議委員などを歴任。当協会の「2025年の生活保障と日本社会の構想研究会」で主査も務める。

#### ■関連情報

#### <2016年9月に駒村氏(編)の書籍を刊行します!!>

当協会が開催した「2025年の生活保障と日本社会の構想研究会」の研究成果をまとめた書籍を9月に発刊します。

タイトル：「2025年の日本 破綻か復活か」

編者：駒村康平

監修：全労済協会

発行：勁草書房

定価：本体価格 2,500円＋税(予定)

#### <2016年10月24日(月)に駒村氏をお招きして東京シンポジウムを開催します!!>

上記研究成果に基づくシンポジウムを東京で開催します。

※詳細は8月10日(水)配信予定のニュースリリースでご案内致します。

基調講演：村木 厚子 氏 (前厚生労働事務次官)

駒村 康平 氏

パネルディスカッション：戎野 淑子 氏 (立正大学経済学部教授)

大原 裕介 氏 (社会福祉法人ゆうゆう理事長)

村木 厚子 氏

駒村 康平 氏

総合司会・コーディネーター：渡辺 真理 氏 (アナウンサー)

**【編集者のおすすめ】** 実父の子を2度堕胎、刑務所の父親に援助交際で差し入れ…現代の哀史 『最下層女子校生 無関心社会の罪』橋ジュン著 産経新聞 2016年8月6日



#### 「最下層女子校生 無関心社会の罪」

#### ■透明な存在たちの壮絶な物語

衝撃だった。終戦直後ではなく、平成の現代において、このような女子がいるとは信じられなかった。著者とともに取材に出かけたある地方都市。目の前に現れた女性は、とても26歳とは思えないほど幼かった。聞けば、母親の命令で小学校さえ通わせてもらえなかったという。電車やバスにも乗ったことがなく、最寄りの駅やバス停さえわからない。徒歩圏内しか知らないのだ。さらには自分の名前や住所も、漢字で書くことができない。母親に、何度も「働いてみたい」と懇願するも、「小学校も出ていないで字も書けない奴が、働けるわけがないだろう」と一蹴され続ける。完全な虐待だ。

現状から脱出したいと、悩める少女たちを救う活動をしている著者に連絡してきたわけ

だが、いざとなると一歩が踏み出せない。それどころか、「お母さん、大丈夫ですかね？ 逮捕されませんか？」と母親の心配ばかりしているのが、何とも切ない。

貧困、虐待、性被害、イジメ、自殺願望など、深刻な問題を抱えながらも、誰にも気付いてもらえず、相談したくとも相談できない彼女たちは既存の制度からもこぼれおちてしまい、社会の統計からも消されて「透明」のような存在として生きている。

実の父親の子供を2度も墮胎させられた19歳、刑務所にいる父親に差し入れをするために援助交際でお金を稼ぐ少女など、15人の若年女子の壮絶な物語。行政機関の限界など現代社会の歪(ゆが)みにも言及する著者渾身(こんしん)のルポルタージュである。(小学館・780円+税) 小学館出版局 小川昭芳

## 世界のおもちゃで遊べるカフェ 諏訪で計画

信濃毎日新聞 2016年8月6日



カフェに改装する部屋で計画を説明する原さん

塩尻市片丘の言語聴覚士原哲也さん(49)が9月、世界のおもちゃで遊ぶことができるカフェを諏訪市湖岸通り5に開店する。安心して親子が遊べる場所を提供するとともに、障害者や高齢者を雇用することも計画している。障害の有無や年代に関係なく、地域住民らが集える場所を目指す。

カフェは「SUWAL23CAFE」。諏訪湖の面積が国内23番目であることにちなんだ。おもちゃは積み木やブロックなどで

「手と頭を使うようなアナログな物にしたい」と原さん。全面積70平方メートル余の半分を遊び場にする。

原さんは言語聴覚士として諏訪市の保育園で発達相談などに当たっている。カフェについて「福祉という堅苦しい言葉ではなく、気軽に子育てなどを話すことができる場にしたい」としている。店舗の横に、子どもの発達や行動の悩みを相談できる場所も設ける。将来は、観光客向けに持ち帰りできる軽食なども提供できる環境を整え、経営を軌道に乗せる考え。

原さんはインターネットで資金を募る「クラウドファンディング」を利用し、カフェで使うおもちゃの購入に充てる。問い合わせはメールで原さん([green@snow.email.ne.jp](mailto:green@snow.email.ne.jp))へ。

## 社会保障給付112兆円 平成26年度、過去最高更新 年金は初めて減少

産経新聞 2016年8月5日

厚生労働省の国立社会保障・人口問題研究所は5日、平成26年度の医療や年金などの社会保障給付費が112兆1020億円で過去最高を更新したと発表した。25年度に比べ1・3%伸び、1兆3970億円増えた。高齢化の進行や医療技術の高度化で今後も給付増が続く見通し。年金は支給額引き下げなどの影響で初めて減少した。

社会保障給付費は医療などの自己負担分を除き、税金や保険料で賄った費用の総額。国民所得に対する比率は30・76%と2年連続で低下した。国民1人当たりでは88万2100円で前年度から1万2500円増えた。

分野別にみると、「年金」が54兆3429億円で全体の48・5%を占めた。「医療」は36兆3357億円で32・4%、介護を含む「福祉その他」は21兆4234億円(うち介護対策費9兆1896億円)で19・1%。

前年度からの給付費の伸びを比較すると、本来より年金額が高い特例水準の解消や、厚生年金の支給開始年齢引き上げで、年金は0・5%減った。一方、26年4月の消費税増

税への対応で介護報酬が増え、臨時福祉給付金の支給があった福祉その他は4・6%、医療も2・0%伸びた。

施設整備費など個人に直接的には支給されない費用を給付費に加えた「社会支出」は1・2%増の116兆8532億円だった。このうち子育て関連支出は対GDP（国内総生産）比で1・34%にとどまり、欧州各国の2～3%台（25年度）と大きな開きがある。

#### 青森県が「企業子宝率」調査 人口減少対策の一環 日本経済新聞 2016年8月6日

青森県は県内企業・事業所を対象に、従業員が在職中に持つと見込まれる子どもの数を表す「企業子宝率」の調査を始めた。人口減少対策の一環で、子宝率の高い企業の子育て支援の取り組みをモデルとして紹介するなどして、子育てしやすい職場づくりを促す。

企業子宝率はいわば企業版の合計特殊出生率。県によると、企業子宝率を調査するのは東北の自治体で初めて。

調査対象は県内の常用雇用者10人以上の企業・事業所で、県外企業の支店やNPO法人、社会福祉法人なども含める。対象先の人事担当者などに、59歳以下の従業員ごとの年齢・性別や子ども全員の年齢、実施している子育て支援策などを調査票に記入してもらう。

県は平均子宝率を発表するほか、子宝率の上位企業や先駆的な子育て支援策も当該企業の了解を得て公表する。

今年度は8月から9月下旬まで約130社を対象に実施し、来年度は常用雇用者10人以上の県内企業・事業所の3割の約3000社に拡大する。

#### 許せぬ言葉

河北新報 2016年8月5日

東京都知事選で、石原慎太郎氏が小池百合子氏をこき下ろした「厚化粧の大年増」発言が波紋を広げた。多くの有権者が自民党を見限るきっかけになり、小池氏への追い風になった。

でも、なぜだろう。いつものご仁のいつもの暴言。そう簡単に割り切れない苦いものに胸がつかえる。

相模原市の障害者施設殺傷事件を受け、石原氏の過去の発言がネット上などで再び話題になっている。

「ああいう人って人格があるのかね」「安楽死なんかにつながる問題じゃないかという気がする」

都知事になったばかりの1999年、重度障害者施設を視察した後の言葉だ。植松聖容疑者が衆院議長に送った手紙の文面や警察への供述内容に似通っていると、注目を集めている。

政治家の差別的な言動は枚挙にいとまがない。高齢者問題に触れ「いつまで生きる気だよ」と言った閣僚もいれば、「女子に三角関数を教えて何になる」と口を滑らせた知事もいた。

うんざりしながらも、そんなニュースに慣れっこになっていなかったか。顧みて、ひやりとする。差別の芽を、私たちは決して見逃してはならない。（整理部副部長 昆野勝栄）  
月刊情報誌「太陽の子」、隔月本人新聞「青空新聞」、社内誌「つなぐちゃんベクトル」、ネット情報「たまにブログ」も

